

まきむく

縄向
考古学通信

Vol.15

2021.08



縄向遺跡第168次調査風景 2010年

特集 | 縄向遺跡 発掘調査 祝200回！

発掘の軌跡をたどる part2

縄向幻想－卑弥呼に会いに行く(2)－

発掘された縄向遺跡R2

令和2年度まきむくレポート

まきむく裏物語：時を経てめぐりあった埴輪片

発掘の軌跡をたどる part2

謎解明進むか？ 箸墓古墳

本コーナーの part 1 でも紹介した箸墓古墳周辺の発掘調査。これまでに20回以上の調査が実施され、少しずつではあるが墳丘周辺の様相が明らかとなってきた。

墳丘の周囲では幅10m余りの周濠の存在が確認されており（68次、81次、109次）、109次では周濠を区切る渡土堤も見つかっている。周濠の外側には盛土による外堤が築かれ、さらにその外側では、墳丘築造のための土取り跡と推定される外濠状遺構が確認されている（81次、85次、118次、157次、163次など）。東西約470m、南北約400m以上の範囲に及ぶ外濠状遺構の存在は、「日は人作り、夜は神作る」と語り継がれた箸墓古墳の築造の壮大さを体現していると言えるだろう。

なお『日本書紀』の壬申の乱に関わる記述には、上ツ道と箸墓古墳が近接する位置が戦場となったことが記されている。後円部北側で確認された整地土は上ツ道に伴うものである可能性が高く（142次）、箸墓古墳のすぐ傍らに古代の幹線道路が設置されたことがわかっていく。

第101次



▲箸墓古墳 北西より



▲箸墓古墳渡土堤 南より

▼纏向石塚古墳



▼ホケノ山古墳出土 画文帯神獸鏡 A 鏡背
榎原考古学研究所 提供



前方後円墳誕生の地

纏向小学校を取り巻くように存在する纏向石塚古墳（144次ほか）、矢塚古墳（160次ほか）、勝山古墳（161次ほか）、東田大塚古墳（159次ほか）は、3世紀代に築造された最初期の大型前方後円墳である。

いずれも前方部が未発達で、埴輪や葺石が存在しない点などは定型化以前の古墳の姿を有しており、後円部径：前方部長がおよそ2:1の比率となる前二者は「纏向型前方後円墳」の典型例とされている。

これらの古墳の直後には、定型化した前方後円墳である箸墓古墳が築造される。その後350年にわたり築造される前方後円墳は、この纏向の地を発信源として、列島各地へと広まったのである。

ホケノ山古墳

纏向遺跡にある「纏向型前方後円墳」の中で唯一、中心埋葬施設の調査が実施された古墳である。第115次調査で判明したその内容は、当初予想し得ないものであった。

埋葬施設は東部瀬戸内地域の影響が色濃いとされる「石囲い木槨」が採用され、加飾された二重口縁壺が供えられていた。

副葬品としては、複数面の画文帯神獸鏡や銅鏃などが出土している。3世紀中頃に築造されたこの古墳は、その後の多くの前期古墳にみられる埴輪や竪穴式石室、三角縁神獸鏡を備えていなかったのである。

このホケノ山古墳の調査を通じて、我々は定型化以前の大型前方後円墳の埋葬スタイルを垣間見ることができた。200次を数えた纏向遺跡の調査の中でも指折りの成果であったと言えるだろう。

纏向遺跡のその後

纏向遺跡では3世紀代に築造された古い時期の古墳が注目されがちであるが、4～6世紀に築造された古墳も多数存在している。

4世紀には、遺跡北部に一辺30mほどの方墳と考えられる二反田古墳(186次)が築造され、市内で他に例のない鰭付楕円筒埴輪が出土している。4世紀の後半～末頃には、箸墓古墳の西側で、全長100m程の前方後円墳と考えられる箸中イヅカ古墳(119次・121次)や、径20m前後の円墳と推定される箸中ビハクビ古墳(112・2次)が築造される。両古墳の南方には稲荷山古墳(196次・198次)が築造されている。詳しい築造時期は不明だが、纏向遺跡では珍しい前方後方墳の可能性がある。

5世紀の後半以降、箸中地区のホケノ山古墳周辺では、径35m程の円墳である茶ノ木塚古墳(190次・194次)や、全長50m以上の前方後円墳である堂ノ後古墳(164次)が築造されるようになる。

このように大型の前方後円墳こそないものの、中・小規模の古墳が遺跡内の様々な場所で発見されている。これらの古墳の存在は、規模こそ小さいが衰退後の纏向遺跡の様子を考える上では、いずれも大きな意味を持つ。



▲堂ノ後古墳出土鶏形埴輪



◀鍛冶関連資料
(第42・57・
80・90次)

鍛冶関連

纏向遺跡の第42・57・80・90・102・174・200次調査などで、量は少ないながらも、鞆羽口や鉄滓、砥石などが出土している。鉄製品の生産は専ら鉄素材を加工する工程にあたる小鍛冶とよばれるものだったようだ。

これまでの調査から、小規模な工房が集落内に散在して生産していた様子が想定され、これら鍛冶資料は当時の集落内における鉄器の生産体制を考える上で注目すべき資料である。

これらの資料のなかには北部九州に特徴的な形態の鞆羽口などの存在もあり、北部九州地域との関係も注目されるところだが、布留0式期～布留1式期(3世紀後半～4世紀前半)を中心とするもので、残念ながら遺跡の前半期にあたる庄内式期の資料は確認されていない。

鉄器の生産体制が解明されるのか、そして鉄器生産が纏向遺跡の集落の謎にどう影響していくのか、今後の調査も気になるところだ。



◀鞆羽口(第174次)

ヤマト王権の中枢か?! 辻地区の発掘

纏向遺跡の中にある辻地区(大字辻)の発掘調査は、昭和40年代後半から続いていたが、平成20年度以降纏向遺跡の居館域を探る調査がはじまると、次第に重要な発見が重なる。

軸線と方位を揃えて建てられた掘立柱建物B・C・D・Fと柱列からなる建物群で、3世紀前半から中頃にかけて建てられたと考えられる。

平成22年度の第168次調査では、建物群の廃絶時に掘削されたと思われる4.3m×2.2m、深さ80cmの大型の祭祀土坑が検出され、中からは多くの栽培植物の種子や魚類の骨、鹿・猪・鴨などの動物骨が出土している。

また、平成26年度の第183次調査では、JR線を跨いだ東側で3世紀後半～4世紀はじめの土坑が検出された。その中からは、古墳時代としては類例の少ないト骨(ほっこつ)が発見されており、奈良盆地東南部において弥生時代から続く儀礼が継続しておこなわれていたことが確認できた。

今回は、辻地区で発見された2つの土坑に注目したが、大型建物跡とともに、王権の中枢部でおこなわれた祭祀の姿を鮮明にしている資料として注目されている。その実態が今後解明されるのか、引き続き注目していきたい遺跡の一部だ。



▲辻地区 大型土坑跡

▶辻地区出土
ト骨



第200次

— for the Future —

ヤマト王権の大王都たる纏向遺跡の発掘第200次調査を記念して、前号に続き、これまでの発掘を振り返ってきました。

今号では記憶に新しい調査の数々が出てきたと思いますが、いかがでしたか? これからも日本の歴史、人々の記憶に残る纏向遺跡での新発見が待っているかと思うと目が離せません!

発掘された纏向遺跡 R2

纏向遺跡第199次調査

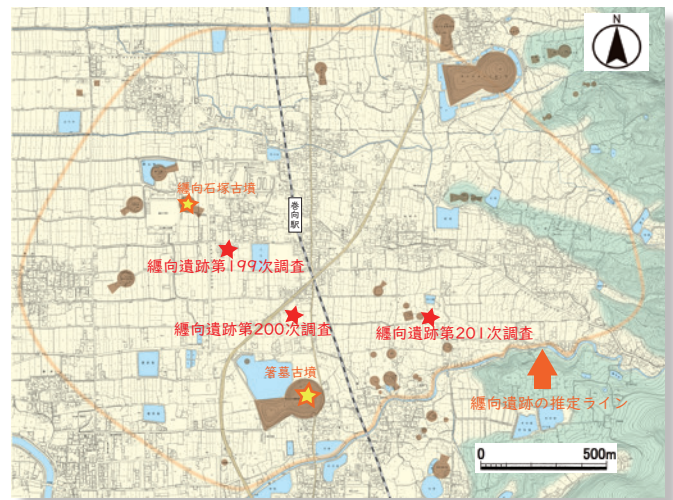
期間：2020年4月8日～5月2日
面積：72㎡

纏向遺跡第200次調査

期間：2020年12月9日～12月28日
面積：111㎡

纏向遺跡第201次調査

期間：2021年3月1日～3月10日
面積：33㎡



▲令和2年度発掘調査地 (S=1/30000)

纏向遺跡第199次調査

この調査は大字太田において、道路拡幅工事に先立っておこなわれました。調査地はJR巻向駅から西に約300mの地点です。

調査の結果、3～4世紀の溝や土坑、柱穴と考えられるピットが見つかりました。溝は北東－南西方向と南東－北西方向のものを数条確認しています。また、柱穴と考えられるものの中には、一直線上に等間隔で並ぶものもありました。トレンチ幅が狭かったこともあり、それぞれの遺構の関係については明らかにすることはできませんでしたが、柱穴や溝は何かを区画する遺構の可能性が考えられます。この他にも3世紀前半の土坑からは、甕や高坏、土製支脚といった日常生活で使用する遺物が見つかったことから、調査地周辺には3世紀の早い段階から人々が居住していたことがわかりました。

今回の調査では、調査地周辺が纏向遺跡の中でも遺構の分布密度の高いエリアであることを再確認しました。周辺で今後おこなわれるであろう開発に注視しながら、継続して発掘調査をおこなう必要があります。（西村知浩）



▲遺構完掘状況（南東から）

纏向遺跡第200次調査



▲調査地と菅墓古墳（北から）

この調査は大字辻において、宅地造成工事に先立っておこなわれました。調査地は菅墓古墳から北に約300mの地点で、調査区を2ヶ所設定しました。

調査の結果、北側の調査区で溝や溝状遺構、土坑、柱穴と考えられるピットなどが見つかりました。出土遺物の中には、3世紀後半の鍛冶に関わる遺物である轡羽口や鉄滓があります。今回の調査では、鉄を熱するための鍛冶炉などはみつきませんでした。鍛冶関連遺物がまとまって出土したことから、調査地近辺に鍛冶工房が存在していたことが想定されます。

南側の調査区では、3世紀後半の河川堆積を確認しました。堆積からは、勝山古墳で出土した団扇形木製品に類似するものや、纏向遺跡で3例目となる木製器台、祭祀に用いられたと考えられている舟形木製品などの貴重な資料が出土しました。このため、調査地から上流の東側の地域は、纏向

遺跡の中でも重要な場所であった可能性があります。

今回の調査では調査地の土地利用状況が明らかとなり、鍛冶工房の存在を考える上での重要な手掛りを得ることができました。今後も調査や検討をおこない、纏向遺跡の鉄器生産がどのようにおこなわれていたのかを明らかにしていきたいと思います。（西村知浩）

高所撮影カメラのご寄贈

桜井市内在住の川口由一様より、「俯瞰撮影システム（株式会社CUBIC製）」を寄贈いただきました。



最大約 6 mまで伸長可能なポールの先端にWi-Fi 接続のカメラを取り付け、手元のタブレットで確認しながら撮影できるシステムです。早速、纏向遺跡第200次調査にて利用いたしました。

所員一同、ここに改めて感謝申し上げます。



纏向遺跡第201次調査



▲中央の溝 土器出土状況（南西から）

調査は大字箸中にある小川塚東古墳の隣接地でおこないました。小川塚東古墳は、これまでに複数の墳丘復元案が公表されています。下図は、天理大学歴史研究会、寺沢薫氏・橋本輝彦氏、そして桜井市教育委員会の各復元案です。今回の調査では、古墳の形や築造時期の手がかりを得ることと、古墳周辺の地形情報を得ることを目的としました。

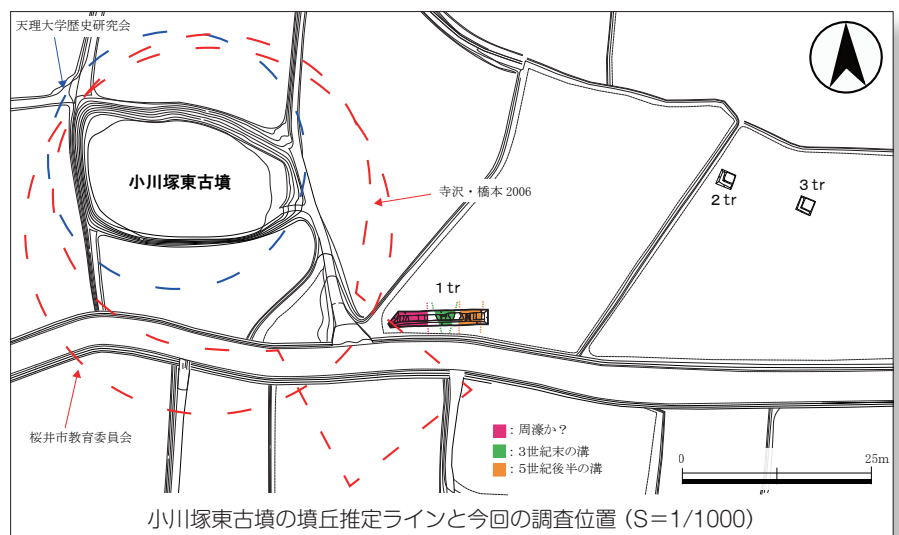
今回の調査では3ヶ所にトレンチを設定しました。第2・第3トレンチからは遺構を確認することはできませんでしたが、第1トレンチからは溝を3条確認しました。東側の溝からは5世紀後半の須恵器、中央の溝からは3世紀後半～4世紀初頭の土師器が見つかりました。西側の溝は、幅約5m以上、深さは約55cmあります。遺物は確認できませんでしたが、土層の堆積順序から中央の溝より古い遺構と考えられます。また

規模と位置関係から小川塚東古墳の周濠の可能性もあります。仮に西側の溝が古墳周濠ならば、小川塚東古墳は3世紀に遡る全長50m前後の古墳となるものと考えられます。

今回の調査だけでは小川塚東古墳の本来の形状や築造時期を確定することはできませんが、今後周辺の調査が進めば、より詳しい古墳の形状や築造時期が明らかになるかもしれません。（森暢郎・藤村裕美）



▲第1トレンチ (1tr) 全景写真（東から）



小川塚東古墳の墳丘推定ラインと今回の調査位置 (S=1/1000)

纏向幻想

— 卑弥呼に会いに行く(2) —

所長 寺沢 薫



『首長霊継承のイメージ』イラスト：西田千秋

タイムマシンはいきなり九州へと飛んだ。雷山の裾野から北へ緩やかに広がる広大な扇状地。そこには筋状のなだらかな丘陵が幾重にも並ぶ。今、福岡県糸島市の糸島平野。そこは「倭人伝」の伊都国の中心舞台だ。まもなく2世紀という時代が終わろうとしていた。

伊都国王宮までは今津湾の入江から瑞梅寺川を遡り、運河^{わた}を航る。ここ伊都国の王が「倭国王」を名乗り、後漢王朝の皇帝に朝貢して五代ほどにもなろうか。私が「イト倭国」(人々はある種の妬^{ねた}みをかねてそう呼ぶ)を訪れたとき、倭国盟主としての伊都国男王が亡くなって、今まさにその墓前では壮大な葬儀が仕切られていた。70ものイト倭国連合のクニ・国のオウや王たちが集結するなかを、朝日を浴びて一人の女性が現れる。イト倭国王として伊都国王に擁立された初めての女王である。

じつはこの日の未明、亡き先王の墓のなかでは重大な秘儀が執り行われていた。低い墳丘と溝で四角く区切られた中央の、必要以上に広く設えられた墓壙^{たいまつ}には覆屋^{とも}が建てられ、ほのかな松明の明かりの灯るそのなかで、何ともおどろおどろし気な儀式が執り行われようとしていた。

一人の特別な巫女に先導されて、棺に横たわる亡き先王の棺の横へ、新たに王となる人物が静かに横たわる。早晚、すべての明かりは消され、張り詰めた漆黒のなかにかすかな呪文が静かに流れる。水の音が聞こえたかと思うと一瞬、一点に火がともされる。

すでに一刻も経っただろうか、日向峠^{ようよ}の空が漸く白む頃、多数の鏡や何かを壊す音が聞こえてくる。亡き先王の霊を新王に移す秘儀はこうした行為によって滞りなく終わった。外に待機していた数名の巫女と男たちが覆い屋に入り、棺は堅固に閉じられる。武器や玉など次々と厳かに運び込まれ、一時の静寂が訪れたと思うと、再び何かを割る音が聞こえてくる。

そう、私が最初に目にしたのは、着替えて上等の絹衣に身を包んだ新女王のすがただったのだ。「噫(ああ、おお)」という歓声のなか、女王は両手を高々と挙げて袂^{ひれ}を振る。奴国王の上表文が読み上げられるや厳かに輿に入り、群集のなかを王宮へと戻っていく。だがそれは、波瀾万丈に富んだ生涯の幕開けでもあった。

初めて女性が伊都国王に擁立された背景には倭国を取り巻く国内外の事情があった。2世紀初め以来、伊都国王を盟主とし、盟友奴国を柱に政治的にも経済的にも順風満帆の部族的国家連合＝倭国を固めてきたけ

れど、ここに^{ほころ}来て綻びが出始めた。世情は海を越えて伝え聞く混迷を極める後ろ盾・後漢王朝と半島情勢の混乱に敏感に反応したのである。

2世紀の中頃から盛んに見られ始めた北方の部族的国家の侵入は、ついには前漢皇帝陵の焼き討ちにまで発展した。羌の反乱や度重なる鮮卑の侵攻への軍事的な対応は、この頃頻発する天変地異や疾病の蔓延による財政の逼迫をさらに悪化させた。社会の混乱はさらなる政治的混乱を生む。対応に無能な王朝はただただ皇后外戚や宦官の権力闘争の場と化し、その造反運動がさらなる混沌を生んだ。世に言う「桓靈（桓帝・靈帝）の間」「党錮事件」「黄巾の乱」はこうして歴史にその名を刻むのである。

事態はめまぐるしく展開する。中平6（西暦189）年、靈帝が崩御すると劉弁（少帝）が即位するが、母である何太后を擁した兄の大將軍何進は袁紹とともに宦官二千人を殺戮する。190年、董卓は少帝を保護して帝都洛陽に入京するが、劉協（献帝）を擁立して洛陽を占拠し、年号を「初平」と改める。袁紹は急遽、董卓討伐軍を組織する。董卓はその3月、洛陽を焼き払い献帝とともに長安へ逃亡するが殺害される。ここに中央政府は壊滅状態となり機能を停止する。後漢王朝は事実上滅亡し、時代はまさに軍閥混戦の三国志の世界へと突入していくのである。



伊都国女王が立った時代とはまさにそうした「とき」の始まる頃だったのである。壱岐から糸島へ向かう外交ルートにも翳りが見え始めた。かねてより太い交易ルートを確保していた奴国にも利が見え始めた。盟主伊都国への一極化に不満と不信感が漂い始めた。代々続いた倭国王としての伊都国男王の系譜にも見直しが求められた。倭国王が伊都国男王の世襲、継承を前提とするような男系は排除すべきとの声が聞こえ始めたのである。

そもそも伊都国王が倭国を代表する連合盟主であるということを承認し、大きな後ろ盾になってきた後漢王朝が衰退し滅亡に瀕しているようなとき、はたしてこのままの体制でよいのだろうか。そんな懸念や疑念の囁きが連合のクニ・国のなかで聞こえ始めた。同じような声はイト「倭国」の外にあるクニ・国からも起り始めた。

2世紀には誕生していた「イト倭国」とは、広形の銅矛と銅戈をシンボルともカミとも崇めた人々のクニ国である。伊都国を盟主と仰ぎ、奴国で大量生産した

とされる銅矛・銅戈を配布してきた領域である。それは北部九州だけでなく四国の西半分に及ぶ。しかし、その周辺にあたる中・南九州、山陰、瀬戸内沿岸、近畿、その以东にも多数の部族的国家が群在する。

これらのクニ・国は新しい時代の到来を肌で感じ始めていた。イト倭国が強大な政治的タッグを組み、後漢王朝のお墨付きを背負って、数々の嗜好品や威信財を初め、鉄素材などを優先的に手に入れ分配していた状況には憤懣この上なかったのだ。「今こそ巻き返しのチャンスだ」「新たな連合の枠組みを」「我らこそが新時代の盟主に」……。

思い思いの行動は、この列島内に進取の気運をもたらし始めた。日本海ルートをさらに開拓したイヅモやタニハ、コシはイト倭国内の海民とも連携して鉄製品やガラス製品、玉類の流通を加速し、各々のオウたちや民衆はオウの墓にアイデンティティーを発揮し一体感を醸し出した。

キビや瀬戸内海沿岸の部族的国家のオウたちも瀬戸内海交易を加速させた。わけでもキビ国連合の盟主「下道」国の王は、見たことのない全長80メートルもの巨大な双方中円形の墓を丘陵上に造って周囲のクニ・国を驚愕させたのである。墳丘の上には巨大な立石が異様にそびえ、なにやら不可思議な文様と顔の描かれた巨石も置かれた。

畿内や東海も例外ではないが、彼らは銅鐸をますます大きく飾り立て、伝統的なマツリを一層象徴化した。こうして、各地の有力なクニ・国が独自性をアピールし、牽制し合いながらも新しい時代の到来に布石を打ったのである。



しかし、「イト倭国」の外のクニ・国がそうたやすく連合を組めるものではない。それぞれの部族的国家が長い間拠り所としてきた「我々意識」が、そう簡単に「あいづら」と一体化できるものではない。「us vs. Them」という意識をときに武力で押さえつけて取り込み、長年をかけて確固たる上下関係を築いてきたイト倭国とは意識も環境も違いすぎた。

「今こそ我々が」という急速な意識変革は、むしろこのときの情勢にはプラスには働かなかった。倭国再編の大変革を推進するには、超えるべきハードルがいくつもあった。八方塞がりの膠着状態と閉塞感。『魏志倭人伝』に記された「倭国乱れる」の真相は実はこのようなことであった。（つづく）

発掘調査をしていると、さまざまな土器や木製品などの遺物が出土します。今回は、私が経験した少し珍しい廻り合わせをはたした遺物についてお話ししたいと思います。

大字巻野内でおこなった纏向遺跡第192次調査では、いろいろな埴輪片が出土しました。その内のひとつに盾形埴輪があります。盾形埴輪は、埴輪の中でも比較的ポピュラーな器種ですが、第192次調査で出土したのは表面に赤色顔料が塗られ盾面に直弧文という文様を施した少し珍しいものでした。

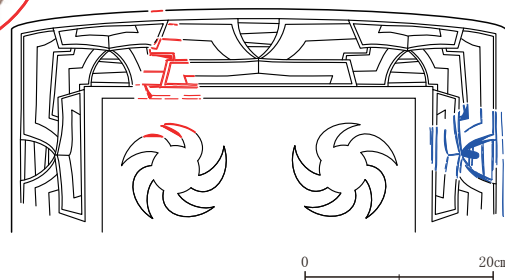
この盾形埴輪を見て思い出したのが、調査より前に市内の中学校でおこなわれている職場体験の一環で、過去の調査で出土した土器などの洗浄してもらっていた時のことです。「巻野内・茅原立会」と書かれたカードが入っているコンテナがあり、その中には土器とともに埴輪片が入っていました。その埴輪片には盾形埴輪も含まれていて、その盾形埴輪の表面に赤色顔料が塗られ直弧文の文様がありました。

直弧文という文様は、同じ直弧文でも細部が違っていることが多いのですが、この二つはほぼ同じ文様であり大きさなどの規格も同じであることから、同一個体ではないかという風に考えたのです。

しかし、巻野内から茅原といえどもとても広い範囲になってしまい、どこから出土したものなのかということがわか

◀第192次調査出土埴輪片

巻野内・茅原立会出土埴輪片▶



盾形埴輪復元図 (S=1/8)

りませんでした。いろいろと調べた結果、第192次調査地の南に隣接している水路の改修工事を昭和47年におこなっていて、その時に工事立会をおこない埴輪などの遺物が出土したという記録が見つかりました。このことから、二つの盾形埴輪は同一個体もしくは同じ古墳に立てられた同じ規格の埴輪だろうと考えられ、約45年の時を経て二つの埴輪が廻り合うという興味深い事例となりました。

小さな破片をもとに、さまざまな手掛かりを調べていく作業は探偵や刑事みたいに推理をしているようで楽しく、これも考古学の楽しさのひとつではないかと実感できる調査となりました。(三沢朋未 現奈良市教育委員会)

令和2年度まきむくレポート

待望の纏向考古学講座開催！！



新型コロナウイルス感染症の拡大で、人類史上まれにみるパンデミックが起きました。纏向学研究センター恒例のイベントも中止や延期が相次ぎましたが、令和3年になり纏向考古学講座を開催することができました。

14名の参加者とともに、桜井駅南口から谷城や文殊院西古墳などの遺跡を、地形との関係を考えつつ巡りました。見方を変えて遺跡をめぐる楽しさに気づいた半日となりました。

編集後記

長らくお待ちしました。ようやく15号をお届けできます。コロナ禍でオンラインツールが発展していくなか、皆様のお手元に残したいと思える紙面をつくることできればと思います。今号のカラー緑とこの通信が知的探求心を刺激しつつも癒しとなりますように。

担当：立石千紘

展示収蔵室からのお知らせ

from桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市立埋蔵文化財センターでは、令和3年10月3日(日)までの期間、『令和3年度速報展 50cm下の桜井27』を開催しています。

※新型コロナウイルス感染拡大の状況により、入館制限や休館となる場合があります。

詳しくは桜井市立埋蔵文化財センターHPをご覧ください。

▶<http://www.sakurai-maibun.nara.jp>

開館 9:00～16:30 (入館は16:00まで)

休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日

入館料 一般300円／小・中学生150円

(20名以上の団体は一般200円／小・中学生100円
市内の小・中学生は無料)

所在地 奈良県桜井市芝58-2

問合せ 公益財団法人桜井市文化財協会

(桜井市立埋蔵文化財センター指定管理者)

TEL0744-42-6005

纏向考古学通信Vol.15

発行・編集 桜井市纏向学研究センター

発行年月日 令和3(2021)年8月25日

所在地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686
芝運動公園内

TEL/FAX 0744-45-0590